

■ 2025 年の共通テストの IIBC について、選択問題の正答率を

大問	設問	平均点	配点	正答率 $0 \leq p \leq 1$	
4	合計	7.50	16	0.50	
	ア-イ	1.59	2	0.80	
	ウ-オ	1.57	2	0.78	
	カ-ク	1.36	3	0.45	
	ケ	1.00	2	0.50	
	コ	0.95	2	0.48	
	サ	0.69	2	0.35	
5	合計	5.91	16	0.39	
	ア-エ	1.18	2	0.59	
	オ	1.18	2	0.59	
	カ	0.34	1	0.34	
	キ	0.75	2	0.38	
	ク-コ	0.54	3	0.18	
	サ	0.65	1	0.65	
6	合計	7.86	16	0.51	
	ア	0.88	1	0.88	
	イ	1.46	2	0.73	
	ウ-オ	1.62	3	0.54	
	カ-コ	0.89	2	0.44	
	サ	1.18	2	0.59	
	シ	0.61	2	0.30	
7	合計	8.65	16	0.54	
	ア-エ	1.90	2	0.95	
	オ	1.53	2	0.76	
	カ	1.30	2	0.65	
	キ-ク	1.20	2	0.60	
	ケ	0.80	2	0.40	
	コ	0.78	2	0.39	

大学入試センター公表のデータをもとにして、まとめた。

左表がその結果である。

■ 正答率は統計<数列<ベクトル<複素数となっている。

「統計にするか複素数にするか」で悩み迷った受験生が一定数いたようだが、この試験では複素数を選んだ受験生の正答率が高かった。

ただ、想像だが、複素数選択者に理系生徒が多く、統計選択者に文系生徒が多く、一般的な傾向として数学では理系生徒の方が数学の点数が高いことから、安易には難易度を云々できない。  
この2つの大問について、問題に踏み込んでみる。

■ 「統計」の大問は(1)~(3)のパートに分かれる。(1)の正規分布表を使った計算(算数) **ア-エ**が6割を切る正答率。**オ**も個数×確率の算数だが、**ア-エ**が正しく求められていることが前提の

設問。(2)は**カ~コ**。標本平均、信頼区間に関する設問で、**カ**、**キ**は公式通りのはずが4割に満たない正答率。**クコ**で初めて算数でない計算が要る設問で、最低の正答率。(3)に今回の学習指導要領改訂で追加された仮説検定の問題が登場する。**サ**の正答率がやや高い。 $m < 110$ を検定するにあたって、帰無仮説「 $m = 110$ 」、対立仮説「**サ**」を6つの選択肢から選び解答する設問。問題文に「統計的に検証したい仮説を「対立仮説」という説明があるので、文章をきちんと読めば正解を選べるので、正答率が高い。これ以降は定番の計算・流れにもかかわらず正答率は低い。

■ 「複素平面」の大問も(1)~(3)のパートに分かれる。

(1) **ア~カ**は複素数の計算をするだけなので易しく、それが正答率にも表れている。(2) **キク**も複素数  $w$  についての偏角条件が問題文に明瞭に記述されており、基本が分かっているれば、容易である。(3) **ケ~シ**は、与えられた条件を満たす複素数  $z$  が複素数平面上で描く図形を、式変形と図の選択肢から答えさせる。(i)は誘導もあって難しくないが、(ii)(iii)は複素数の設定が少し面倒で、時間切れになった受験生も多いのかもしれない。